

ドキュメント

追われゆく 労働者

鎌田慧



ちくま文庫

ドキュメント 追われゆく労働者

一九八七年四月二十三日 第一刷発行

著者 鎌田 慧（かまた・さとし）

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八 ㊟二〇一九一

電話東京二九一―七六五一（営業）

二九四―六七一一（編集）

振替口座六一四二二二

装幀者 安野光雅

印刷所 中央精版印刷株式会社

製本所 中央精版印刷株式会社

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

©SATOSHI KAMATA 1987 Printed in Japan

ISBN4-480-02073-X C0136

ちくま文庫

ドキュメント
追われゆく労働者

鎌田 慧



筑摩書房

目次

第一章	ジプシー工場	9
第二章	回遊魚	31
第三章	厚い皮膚	53
第四章	巣籠り	79
第五章	堅いベンチ	107
第六章	みえない鉛	131
第七章	機屋の夢	155

第八章	十五夜……………	179
第九章	請負耕作……………	201
第十章	残存湖……………	225
第十一章	陽コあだネ村……………	251
終章	取材余話……………	275
解説	一周おくれのトップランナー……………	289
	長部日出雄	

写真——高山清隆

ドキュメント

追われゆく労働者



“不況”がはじまると、農村の工場がつぶれ、都会では出稼ぎ者が最初に
きりすてられる。西成源一郎さんも、村にとりのこされたひとりである。

（秋田県稲川町で）

第一章 ジブシー工場

一九七五（昭和五〇）年一月六日、月曜日。成田サキさんは夫の搜索願いを弘前署にだした。成田昭六さんは、まえの年の正月あけに東京の出稼ぎさきへもどってから、もう一年以上も音信不通になっていた。お盆にはかえってくるだろう、そうおもいながらまちつづけたが、それもむなしくすぎ、正月にはきつとかえってくる、そんな期待もいたずらにおわり、ついに三箇日（さんかじち）も暮れてしまった。サキさんは実家と相談したすえ、とうとう「搜索願い」などというおおごとにしてしまったのだ。

夫の昭六さんは、その名前が示すとおり、昭和六年に生まれているから、ことしで四四歳になる。農家生まれであっても、三男坊だから、田んぼも畑もっていない。むかしからの出稼ぎ暮らしで、サキさんと結婚するまえも、してからもずっと出稼ぎにでていた。昨年一月に東京M組の飯場にもどったのだが、まもなく「よそに移る」と書いた葉書がきたつきり、そこでプツンと連絡はとだえてしまったのだった。それまでも出稼ぎさきから便りをよこすことはまれで、送金もけっして順調にはきていなかった。サキさんは、結婚一二年目であらう

やく生まれた則子ちゃん（四歳）を育てながら、親方（義兄）の百姓仕事の手伝いで、なんとか留守をまもっていた。

「酒のむんだから、どこかで事故に遭っていないか、それが案じごとです」

ストーブのそばにやや疲れたようにすわり、けむたそうに目をほそめて薪をくべながら、サキさんはそういうのだが、それでもみる夢は、事故のことなどではなく、きまってかえってきたときのことばかりだそうである。炬燵のうえに、印刷された子供部屋の紙の模型をたてて、一粒種の則子ちゃんがあそんでいたが、それはテレビのコマーシャルにでてくる「リカちゃん遊び」の豊かさとはとおくへだたったもので、肝心の人形はどこにもころがっていないのだった。あたりが雪にうずもれてしまえば、農作業の手伝い仕事もなく、なにかにつけ心配してくれる親方も病気で入院、生活もゆきづまっていた。リング袋のなかに黒いシートをいれる内職は、根をつめてやっても、せいぜい一日三〇〇円。子供をかかえてはどこにもはたらきにでられないのだ。わたしがかえるとき、薄暗い土間の靴がよくみえるようにと、サキさんは裸電球のスイッチをひねった。それをみて、この子はこうさけんだ。

「まだ、夜でないから、電気つけなくてもいいのに」

いま「母子家庭」になってしまった、生活のつましさを、わたしはその言葉に感じた。

青森県弘前市大沢部落。成田さんのかえりをまつこの部落は、一三年ほどまえ弘前市に統合された純農村なのだが、わたしはここで、小学校時代の友人からおなじようなしをふたつ、三つきかされた。やはり出稼ぎにでて「行方不明」になったひとがいた。ある日、ひ

よっこりかえってきたのだが、あくる日になって、蔵にあった供出用の米（五反歩分）を売りはらい、その金をもってまたでかけてしまった。もうかえってこなくなって五年にもなる。やがて大きくなった娘たちは、父をたずねて東京へいったそうだが、そこですであたらしい生活を営んでいた父は、かえるとはいわなかったという。

暮れに死体で発見されたひとがいた。四三歳のAさんは、炬燵にはいったままの姿勢で、五日間放置されていた。それまで毎年、夫婦で出稼ぎにいつていたのだが、その年は夫のAさんのほうがからだの具合が悪く、奥さんだけがはたらきにでた。村にのこされたAさんは、まいにち酒びたりで近所づきあいもなくなっていた。死因は心臓マヒだった。Bさんは大鰐駅で列車から転落して、轢死した。出稼ぎにいく舅^{しゅうと}を見送りにいき、荷物を網棚にのせ、動きだした汽車からとびおりたときに、雪で足をすべらせたのである。かれは舅より一足さきに神奈川県にでかけていたが、奥さんがかかる交通事故に遭ったとの知らせをうけて、出稼ぎさきから帰郷していたのだった。大沢部落は三一〇戸ほどで、出稼ぎ者は二三〇―二四〇人。これまで出稼ぎさきで死んだひとは六人にもなるという。

出稼ぎにいくものの、のこるもの、そこにはそれぞれのドラマがある。わたしは、弘前から青森にでて、盛岡から東北本線北上駅にでた。そこから、奥羽山脈を北上線でくぐって横手市にぬけ、秋田県をまわって帰京した。そのあいだ、まいにち、それぞれの駅から正月休みをおえて、上京する出稼ぎ労働者たちといっしょになった。それぞれのグループは、窓のふちに四合入りの酒ビンや缶ビールを林立させ、談笑しながら、不況の東京へとむかっていた

のである。

*

成田昭六さんは、昨年一月までM組の飯場にいた。そのさきから、行方不明になったのである。さがすとすればまず、M組で様子をきいてみるほかてがかりはない。村からの出稼ぎ仲間はいなかったし、東京には親戚もなかった。奥さんのはなしによれば、これまでも仕送りしてくることはほとんどなかったのは、酒好きで、のむと気が大きくなってハシゴをつねとするからであって、べつに夫婦仲が悪いというわけではなかった。昨年一月、正月休みをあわただしくおえて、また出稼ぎに出発するときも、喧嘩するようなこともなく、"行方不明"にむすびつけて考えられるものはなにひとつなかったという。だからこそかの女は、お盆ならきつと、正月こそはほんとうに、と夫のかえる夢だけをみながら、子供とまちつづけ、ついに搜索願いをだすことにふみきったのである。

杉並区高井戸東一丁目。井の頭線浜田山駅で下車すると、このあたりはひっそりした住宅地帯である。ちかくの牛乳屋で、サキさんからきいてきたM組の番地をいうと、一丁目には該当する番地はなかった。成田さん本人か、奥さんが書きまちがえたのかもしれない。わたしは、それらしい飯場のある場所をきいて歩いたが、たどりついたさきは、まったく名前のちがう飯場なのである。学校やグラウンドがゆったり敷地をとっているこのあたりに、歩いてみればおもいがけないほどの飯場が点在し、人影のない軒先には作業ズボンが逆さに吊

るされ、あわい冬の陽に干されていたりした。鉄骨にスレートをうちつけただけの、どこでもおなじつくりのそれらの飯場は、外観からだけみると、それと軒をならべてたつ木造二階建ての民間アパートと、さほどちがわないのだった。それらの窓も、共稼ぎなのか、カーテンをひいた窓にはやはり、リング状の洗濯干しが風にゆれているのである。

歩く道は、ガスパカ水道管をうめる工事のためか、まんなか深くえぐられ、その縁にしゃがんだ黄色いヘルメットの労働者たちが、東北弁でなにやらはなしあつて笑っていた。

「成田昭六さんを知りませんか」といいだしかねないので、いそいでそこをとおりぬけると、ちょうどおりよく自転車をおした若い郵便配達夫とあうことができた。かれはM組を記憶していた。だいぶまえに引越して、飯場はもうないですよ。局に移転先の通知はないですか。いや郵便物は全部返送しています。わたしは「転居先不明」の赤いスタンプをおもいおこした。ほかの飯場はまだのこっていますから、そこでできいてみたら。おしえられていったさきの空地には、なるほどイメージどおりの鉄骨スレートづくりの飯場が三棟ほどたっているのである。わたしがきてきた番地は一―四七だったが、そこは一―一―四七で、丁目と号のあいだにはさまっている番地がぬけおちていたのだった。

しかし、たどりついたものの、寝にかえるだけの飯場には、日中だれもいないのである。そこは奇妙な静けさで、いくにんかの男たちが生活している感じがまるでないのだった。入口のそばにちいさな金網をはった箱があつて、なかで鶏が二、三羽動いているのがみえた。だからひとが住んでいるのはたしかなことなのだ。あたりにはネコ（手押し車）や、工事中

の道路にならべる黄色く点滅するランプのついた柱やツルハシのマークがはいった道路標識やコンクリートを流しこむ鉄の樋や、高速道路にたちならぶ首のながい照明灯などが乱雑にほうりだされ、空地のすみには、とりこわされた飯場の跡があつて、こわれた魔法瓶とか欠けたドンブリなどがころがっていた。

そこから、この住宅難の時代には、いまどき信じられないようなスキの立枯れた原っぱがひろがり、子供たちがはしるのがみえ、その喚声が風にのってきこえてきた。それは、ここに寝起きしていた成田さんがみたものでもあつたはずだ。そのとき、かれの脳裡を、はたして故郷が、雪にうもれた軒のひくいわが家が、そしてそこでまつ、結婚後一二年目にしてようやく生まれたわが子の姿が、よぎらなかつたのだらうか。

わたしは近所をまわつてようやく、M組は練馬区に引越したことを知ることができた。そして、この原稿を書いている一月二〇日になって、ようやく成田さんの消息を知ることができたのである。

M組はどうしたことか、いまはK建設と名前をかえていた。成田昭六さんは、名簿によれば八月一〇日までたしかにそこにいた。M組、いやK建設の事務所のはなしによれば、成田さんは、はたらくときは一カ月間みっちりはたらくのだが、月末になって賃金をうけとると、一週間も二週間も仕事を休んで酒をのみつづけていた、という。だから、M組では「他人にも迷惑をかけるので、やめてもらった」という。九月になって、M組に賃金をうけとりにきたとき、やはりどこかの建設現場ではたらいっている、といっていたそうである。M組ではた

らいた期間は、やめるまでの、いやクビになるまでの二カ月間ていどで、そのまえはちがう現場にいたのだ。

すると、家族にたいして消息を絶ったのは一月だから、それからの約半年間はかれの空白期間となる。そのごM組が移転した前後から、またどこかへ流れ、M組がK建設と名前をかえてからは、いっしょにはたらいっていた仲間も離散し、ついにかれは、この都会のなかで、たしかに生活しているにもかかわらず、「行方不明者」となってしまったのである。

出稼ぎ者たちは飯場を転々として彷徨し、飯場自体もまた仕事とともに移動する。そのなかには、M組のように、名前までかわってしまいうものまである。出稼ぎ労働者たちがあつめられて、道路や橋やビルがつくられる。道路や橋やビルディングが完成し、それをおおっていた枠組みがとりのけられて、全容をあらわすと、そのなかで汗を流し、うごめき、はたらいっていた労働者たちは四散してしまふ。まして途中で消えてしまったひとたちの「そのご」は、もはやだれにも知りようがない。

一月二〇日現在、わたしは昨年八月一〇日まで成田昭六さんがいた場所を知ることができた。しかしいまなお、かれの妻と娘は、わたしもまた、かれはいま、どこで、なにをし、なにを考えているのか、いったいなにから逃げようとしているのか、についてのなんのてがかりももっていない。

*